

デザイン部会

手とアタマの新しい関係

渡辺誠氏の誘導都市



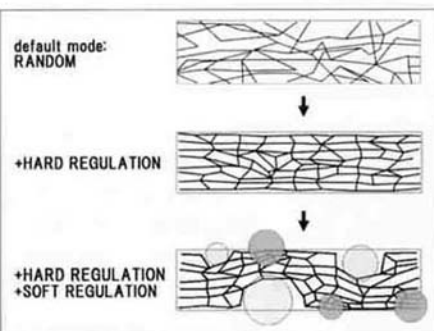
デザイン部会長 連 健夫

デザイン部会では、「建築とプロセス」をテーマに講演会を毎月の定例会として行っており、今回は新年初めとして、今後の建築を考える上に相応しい建築家・渡辺誠氏を招いた。氏は青山梨園専門学校国際コンペ1位をとられ、様々なイメージを誘発させる建築作品で話題となり、その後、お台場のKミュージアム等、新しい建築を常に探求している建築家の一人である。この講演でも氏の建築理論である「誘導都市」というコンピューターを建築デザインの頭脳として扱う独創的なアイデアをビジュアルな表現で分かりやすく説明された。これは、コンピュータープログラムが自動的に形態を決定するというもので、都市の形態決定、街路パターンなど様々なものに応用できるとの視点から、この10年来、氏が探求しているもので、この理論の具現化として大江戸線の飯田橋駅を紹介された。朝日新聞(2000年11月25日夕刊)の第1面で、「生物建築」の見出しで紹介されており、参加者の何人かはすでにイメージは分かっているものの、やや難解なデザインという印象を持っていたようである。しかし、あのうねった黄緑色のパイプが、絶対条件としての「領域」「角度」「枝分かれ」の設定と、柔らかい条件としての「空間の広がり」という条件を持つプログラムによって形作られたと、そのプロセスからの説明で明確になったのが、参加者から多くの質問が出て、活発なディスカッションとなった。特にコンピューター

技術の発展と建築家の役割に関する話題である。氏は、プログラムとはいえ、あくまでその条件設定は人がおこなう。特に柔らかい条件は、建築家の視点、価値観がものを言うとのこと。つまり、技術の発展によって、建築家のすべき点がより浮き彫りになってくる。一方、望むと望まないに関わらずコンピューター技術の発展は、頭脳としての役割を持ち、その範囲は拡大することは間違いないと氏は明言する。「こうあるべきだ」ではなく「こういう建築があっても良いのではないか」という氏の語り口は逆に説得力のある必然性を感じる。自然と戦わない建築、つまり自然と建物の間にある建築作品として紹介されたファイバーウェブのシリーズも彼の建築の一つの方向を示すと共に彼の人物も見えてくるようである。

4年前、アジアの建築家グループを案内している時、シンガポールのタン・ガン・ビー氏が渡辺氏と友人であることを知り、一緒に食事をするようになった。海外と日本の評価軸の異なるのか、氏の活躍をむしろ海外から聞くことが多い。デザインの下地としてのプロセスと結果との関係に建築の意味が与えられ、同時に評価軸が持たられるという視点は今後の建築にとって必要なのではなからうか。彼のアプローチはデジタルであり、私はアナログではあるが、この点の共通点を感じ、正直、刺激を受けた講演であった。

<(有)連健夫建築研究室 主宰>



大江戸線飯田橋駅WEB FRAMEの生成過程と完成写真。6月からドイツ建築博物館で展覧会。(http://www.makoto-architect.com)